

## 研究ノート

## 豊後高田市所在の大原古墳の発掘調査概要報告

玉川 剛 司

## 【要旨】

豊後高田市は、古墳時代中期から後期にかけての古墳が築造されており、前期を中心とする宇佐市の川部・高森古墳群から豊後高田市域の墓域へと首長墳の系譜が移動したとされる重要な地域である。しかし、重要な地域であるものの、古墳の測量調査や発掘調査が進んでいない。そこで、豊後高田市との協力のもと研究プロジェクトを立ち上げ、2021年度より実施している。本論は、その研究プロジェクトとして最初に取り組んだ。大原古墳の測量調査と学術発掘調査について、現時点における成果を報告し、首長墓の動向を予察するものである。

## 【キー・ワード】

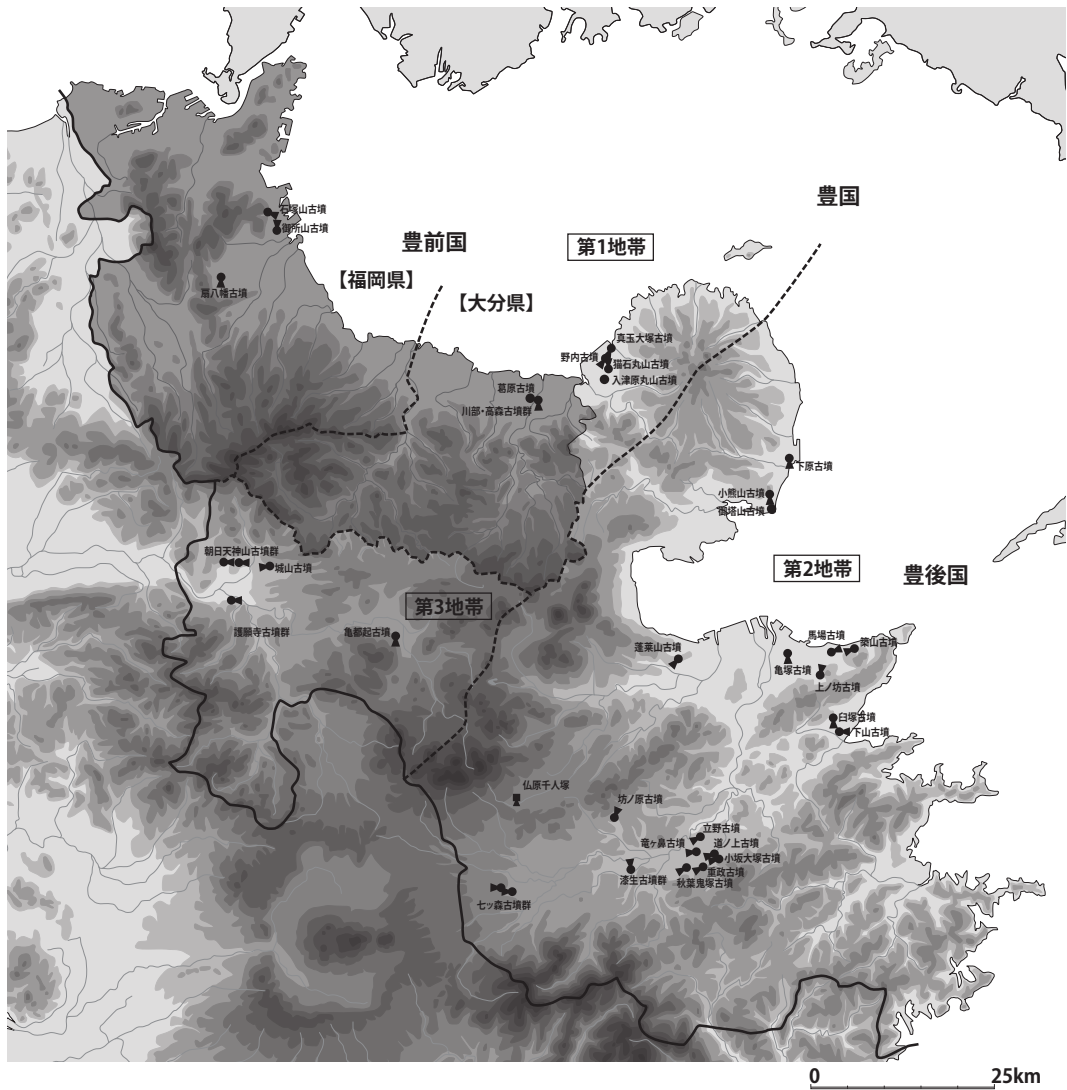
古墳時代中期初頭、前方後円墳、帆立貝式前方後円墳、墳丘測量調査、学術発掘調査、3D計測

## 1、はじめに

豊後高田市域には、中期初頭の入津原丸山古墳の築造を皮切りに、古墳時代後期まで古墳が築造される地域である。その数は、66カ所にもものぼると報告されているものの、2基の前方後円墳の学術発掘調査しかされておらず、古墳時代の様相がつかめていない地域である。そこで、各古墳の規模や築造時期を明らかにすることで、隣接する古墳時代前期を中心とする川部・高森古墳群の被葬者との関係や、ヤマト政権とのかかわりを解明することを目的とし、研究プロジェクト「大分県北部地域における古墳時代前期から中期にかけての首長系譜の研究」を豊後高田市との協力のもと立ち上げた。その一環で、2021年度より当地域において、最初に築造されたと考えられている入津原丸山古墳に近接する大原古墳の学術発掘調査を実施している。本論は、この大原古墳の学術発掘調査の概要を報告するものである。

## 2、豊後高田市域の古墳時代

大分県の古墳時代（第1・2図）は、3つの地域に分けることができ、第1地帯は豊前地域と国東半島西側まで、第2地帯は国東半島東側から別府湾を含む南側まで、第3地帯は、筑後川流域である（田中1992）。大分県内で最も古い古墳は、国東半島の南側の下原古墳（国東市）で、古墳時代前期初頭（前方後円墳集成編年1期、以後「集成1期」と称す）である。その後、第1地



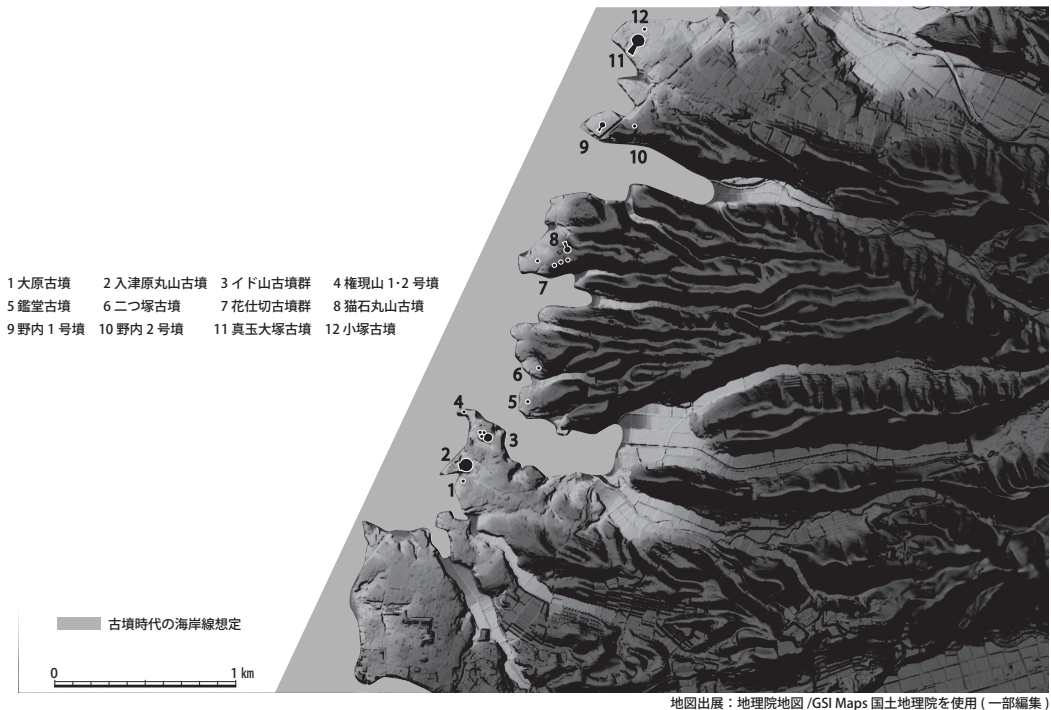
第1図 大分県の主要古墳分布図

帯（第1図）である宇佐市に赤塚古墳ほか6基の前方後円墳と円墳・方墳で構成される、川部・高森古墳群（弥生時代終末期～中期初頭〔庄内併行～集成4期〕）が築造される。つまり、古墳時代前期には、大分県の北部地域に築造が集中するという状況である。この川部・高森古墳群の北東約9km地点の豊後高田市内に、入津原丸山古墳（豊後高田市）が存在する。

この入津原丸山古墳（第3図）は、墳丘の西側に長さ7m、幅23mの方形の造出をもつ3段築盛の帆立貝式前方後円墳である。墳丘斜面は、畑地耕作により一部削平を受けているものの、比較的良好に遺存している。造り出し部も含め、全長77mの規模が想定されている。表面採集された円筒・朝顔形埴輪から中期初頭（集成4期）の築造であると考えられており（田中2000）、豊後高田地域において最古の首長墳であると想定されている。本古墳の築造を皮切りに豊後高田

福岡県					豊前					豊後					第3地帯									
時期区分	須磨野	京都部	上毛部	下毛部	宇佐部	国崎部	遠水部	大分	大正	丹生	濱部	神崎	日井	佐伯	三草	大野部	柳方	直入部	玖珠郡	石田郡				
前期 前期	野方1 野方2				野方1 野方2 野方3 野方4 野方5 野方6 野方7 野方8 野方9 野方10 野方11 野方12 野方13 野方14 野方15 野方16 野方17 野方18 野方19 野方20 野方21 野方22 野方23 野方24 野方25 野方26 野方27 野方28 野方29 野方30 野方31 野方32 野方33 野方34 野方35 野方36 野方37 野方38 野方39 野方40 野方41 野方42 野方43 野方44 野方45 野方46 野方47 野方48 野方49 野方50 野方51 野方52 野方53 野方54 野方55 野方56 野方57 野方58 野方59 野方60 野方61 野方62 野方63 野方64 野方65 野方66 野方67 野方68 野方69 野方70 野方71 野方72 野方73 野方74 野方75 野方76 野方77 野方78 野方79 野方80 野方81 野方82 野方83 野方84 野方85 野方86 野方87 野方88 野方89 野方90 野方91 野方92 野方93 野方94 野方95 野方96 野方97 野方98 野方99 野方100																			
中期	TK216																							
後期																								
終末期																								

第2図 大分県の主要古墳編年図 ①



第3図 豊後高田市域の主要古墳分布図

市内に古墳が築造されはじめる。この入津原丸山古墳の築造後は、古墳時代中期後葉（集成7期）の前方後円墳である真玉大塚古墳（全長100m）、後期初頭（集成9期前半）の前方後円墳である野内2号墳（全長約50m？）が築造され、後期前半（集成9期中頃）の前方後円墳である猫石丸山古墳（全長85m）に続く首長系譜が考えられている。このほかに、時期・規模等が不明な古墳が第3図のように、入津原丸山古墳から猫石丸山古墳の間に立地しており、中期初頭（集成4期）の入津原丸山古墳と中期後葉（集成7期）の真玉大塚古墳の間の時期に築造された可能性がある。

そこで、研究プロジェクトの最初の調査として、入津原丸山古墳の120m南側に存在する大原古墳の学術発掘調査を実施した。調査の詳細は、以下のとおりである。

### 3、大原古墳の学術発掘調査

#### (1) 大原古墳の概要

大原古墳は、墳頂部に箱式石棺が露出している高塚墳である。この大原古墳の約120m北側には、円墳としては県内でも最大級の規模を誇る入津原丸山古墳（墳長77m）が存在する。この入津原丸山古墳は、墳形や採集された埴輪から古墳時代中期初頭に築造された古墳であると考えられている。この入津原丸山古墳周辺には、イド山古墳群や大原古墳などを含む多くの古墳が集中している（第3図）。ヤマト政権と国東半島北側の首長の関係を考える上で、古墳時代中期初頭に造営が始まる入津原丸山古墳周辺の古墳群との関係を検討することが重要となる地域である。

## （２）調査の目的

大原古墳は、墳頂部に箱式石棺が露出しており、墳丘の盛土も削平を受けている古墳である。墳形については現状で長方形を呈しており、本来の墳形や規模、周溝の有無、築造時期など不明な点が多い古墳である。そこで本調査の目的は、墳丘測量調査による現状の墳丘形態の確認と、学術発掘調査による墳形および規模の確認、周溝の有無の確認である。また、出土した遺物から築造された時期を明らかにすることも重要な課題の一つとなる。

## （３）調査期間

第1次調査：2021（令和3）年12月17日（金）～2022（令和4）年3月30日（水）

実習期間は12月23日（木）～28日（火）それ以降も実測を実施

第2次調査：2022（令和4）年8月5日（金）～2023（令和5）年3月30日（木）

実習Ⅰ：期間8月7日（日）～12日（金）それ以降も調査を実施

実習Ⅱ：期間1月24日（月）～30日（月）それ以降も調査を実施

## （４）調査主体

別府大学文化財研究所

## （５）調査体制

1次調査：調査担当 別府大学文学部史学・文化財学科 准教授 玉川 剛司

調査副担当 教授 田中 裕介

調査指導補助 朝川千聖、重岡菜穂、向井浩太、本門拓也、森中明音、  
吉野穂香（大学院文化財学専攻1年）

調査補助 実習生・自主参加30名

2次調査：調査担当 別府大学文学部史学・文化財学科 准教授 玉川 剛司

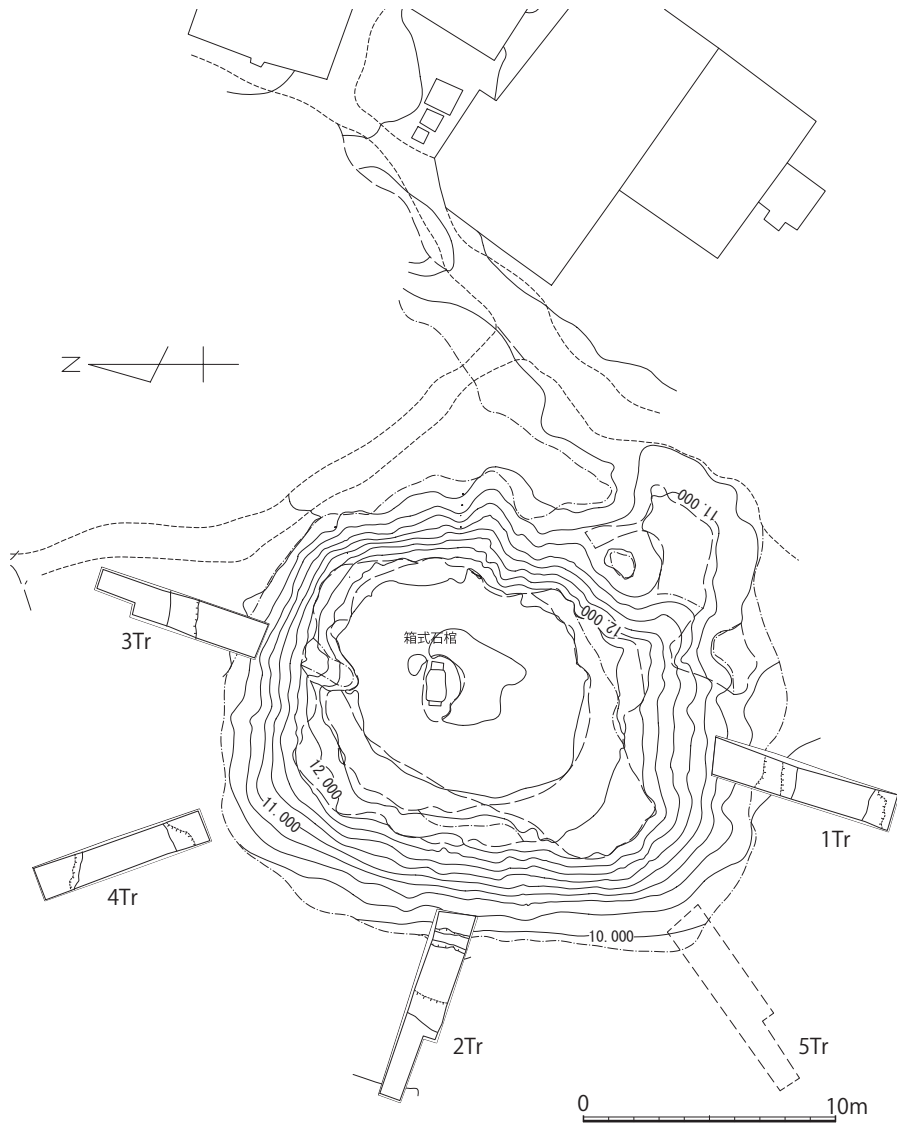
調査副担当 教授 田中 裕介

調査指導補助 朝川千聖、向井浩太、本門拓也、森中明音、  
吉野穂香（大学院文化財学専攻1年）

調査補助 実習生・自主参加30名

## （６）調査内容

発掘調査の前に、墳丘測量調査を行った。測量調査で使用する座標は、事前に入津原丸山古墳の南東側に2点の世界測地系の座標系の基準杭の設置を業者に依頼<sup>(2)</sup>し、設置された杭から大



第4図 大原古墳の調査区配置図 (S = 1 / 300)

原古墳まで座標移動した。測量調査は大分県内で多くの古墳の墳丘測量調査を実施してきた「変化点測量」(玉川 2003・2004)で行った。この測量調査で得られた座標データより 25cm 間隔の等高線の墳丘測量図を作成し、測量図調査区の設定に利用した。

第1次調査として、墳裾に1～3トレンチを設定(第4図)し、調査を実施した。1トレンチは墳丘南側に、2トレンチは墳丘西側に、3トレンチは1トレンチの対岸の墳丘北側に設定し調査を行った。

第2次調査としては、設定した1・4・5トレンチの調査を実施した(第4図)。1トレンチは、1次調査の継続として、4トレンチは3・2トレンチ間に、5トレンチは1・2トレンチ間にそれぞれ設定した。各トレンチの位置は、墳形と墳丘規模を確認するため、墳端・周溝の検出を目的に

第1・2次調査でそれぞれ設定し、学術発掘調査として実施した。実習期間については、(3) 調査期間で述べた通りで、本学の「埋蔵文化財実習Ⅰ・Ⅱ」の実習の場としても活用し、考古学研究室の学生や大学院生も自主参加として参加している。調査成果は、以下のとおりである。

## (7) 調査成果

### 1 トレンチ（第5図、図版1）

古墳の南側に設定した調査区である。墳端が良好に遺存していると考えられた調査区の一つであるが、1次調査の期間内での完掘が困難であると判断したため埋め戻していた。2次調査では、埋め戻した土を再度掘り起こし調査を実施した。トレンチは、幅1.5m、長さ7.5mで設定した。

調査の結果、トレンチの墳丘側から3.25mの地点で、トレンチと直交するように墳端と深さ25cmの周溝を確認した。また、墳丘外側の周溝の立ち上がりは、トレンチ外側から1.1m墳丘側で検出された。これにより周溝底部の幅は、3.1m程度であることが確認できた。墳端と想定される箇所には、墳端の基底石であると思われる30cm程の礫がトレンチ南側で検出された。周溝埋土には、葦石と考えられるこぶし大の礫や埴輪片（円筒・朝顔形埴輪片など）が多く含まれ、本来墳丘斜面に葦石が存在していたものと考えられる。なお、墳端の標高は、9.4mである。

### 2 トレンチ（第6図、図版1）

古墳の西側に設定したトレンチで、調査の結果、近世代の古墳の削平の痕跡と墳丘側に掘削後の溝状遺構を検出した。この近世代の削平により、墳端のほとんどが削平を受け明確な墳端・周溝が確認できなかった。また、削平後に本来墳端があったと考えられる地点に浅い溝状遺構がみられ、この溝状遺構の墳丘側の傾斜変換の上端付近から窪みの底部にかけて焼土と炭化物が大量に出土した。この溝状遺構の堆積土に多くの埴輪片が含まれていた。また、この溝状遺構には、数か所の小さなカクランがみられ、このカクランに焼土や炭化物が多く入れられていた。今回、検出したこの溝状遺構については、地山直上に地山混じりの黒色度が薄くレンズ状堆積し、その上面に焼土や炭化物混じりの層が堆積していたことから、墳端の痕跡である可能性があると考えられる。なお、この墳端と考えられる溝状遺構の下端ラインの標高は9.4mであった。

出土した遺物は、円筒埴輪片、朝顔埴輪片のほかに家形埴輪片も多く出土している。

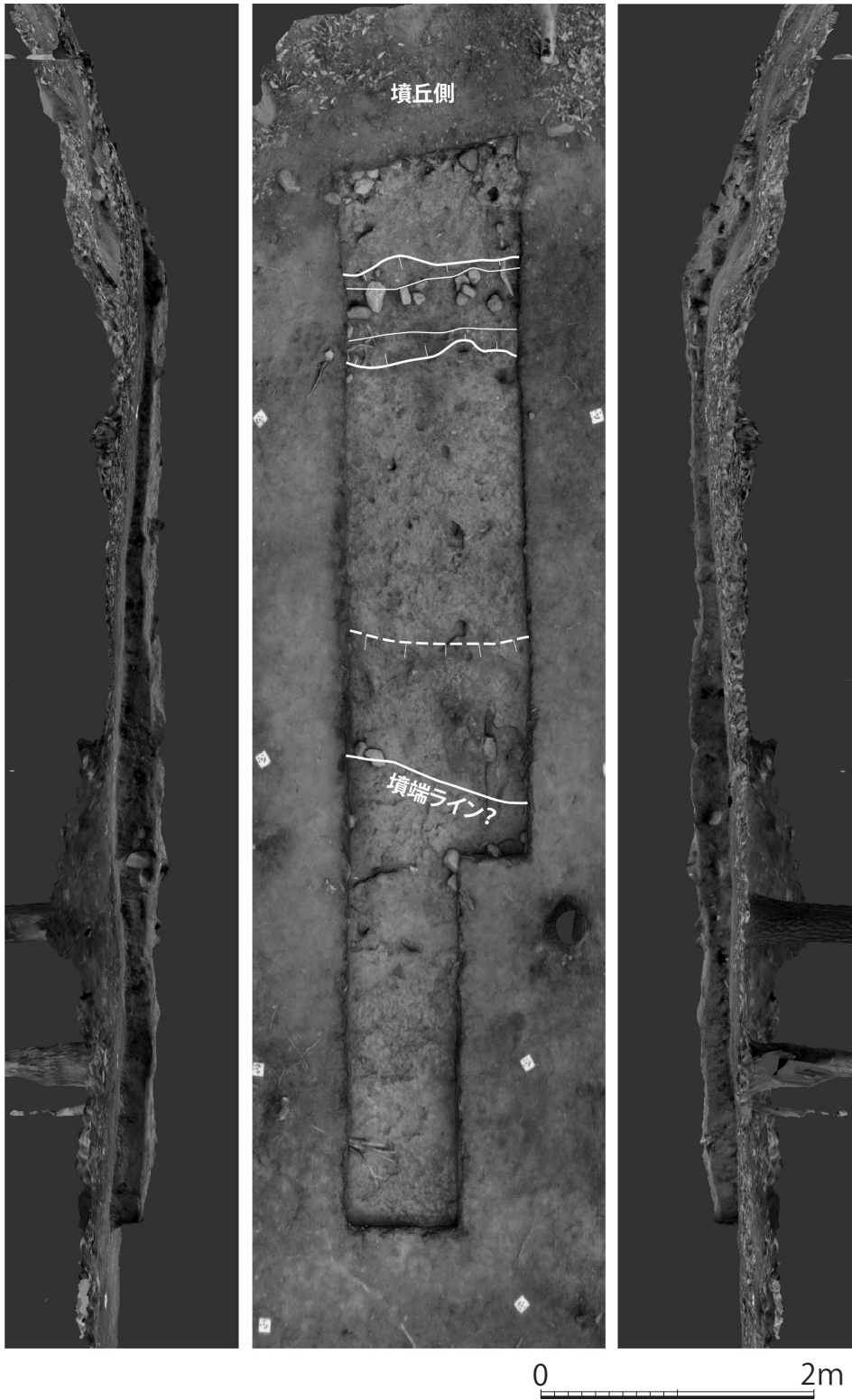
### 3 トレンチ（第7図、図版1）

古墳の北側に設定したトレンチで、調査の結果、墳丘盛土が掘削された痕跡と墳端が確認できた。トレンチの中央付近に地山を削り出した上端の傾斜変換を検出し、その外側に下端の傾斜変換ラインが検出された。墳端ラインから外側については、広いテラスが続いており、立ち上がりの傾斜変換ラインが確認できなかったことから、周溝は伴わずそのまま墳丘北側の谷につながるものと想定した。なお、墳端の標高は9.53mであった。墳端上位の土層には葦石と思われる多く

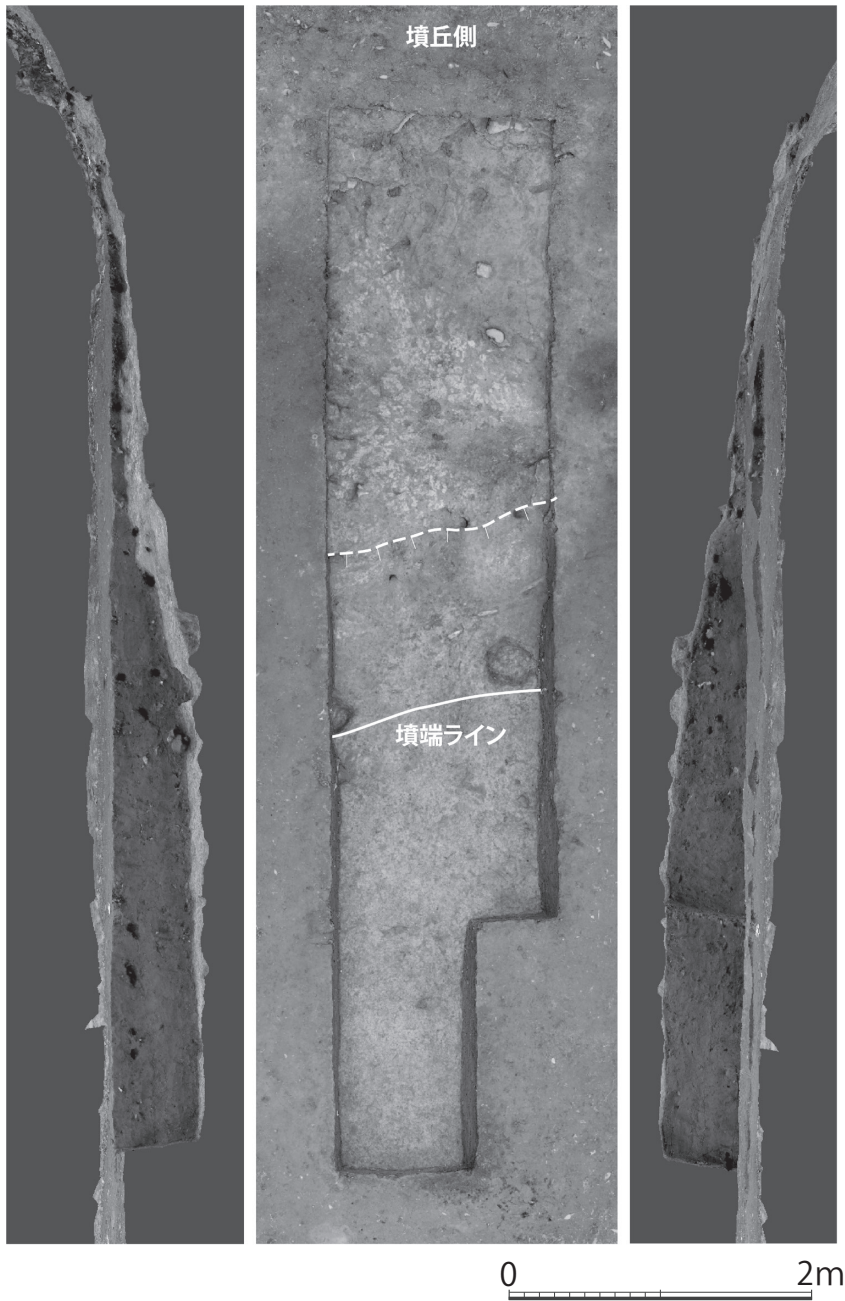


第5図 1 トレンチ展開図<sup>(3)</sup> (S = 1/50)





第6図 2トレンチ展開図<sup>(3)</sup> (S = 1/50)



第7図 3トレンチ展開図<sup>(3)</sup> (S = 1/50)

の礫や埴輪片が含まれていたため、墳丘斜面の流土であると考えられる。出土遺物としては、地山直上に大量の円筒・朝顔形埴輪片が出土している。

#### 4トレンチ (第8図、図版1)

4トレンチは、古墳の北東側の1次調査で実施した2トレンチと3トレンチとの間に設定した

トレンチである。調査の結果、トレンチの墳丘側から1.4m外側で墳端を確認した。また、その地点から3.6m外側に周溝の対岸の立ち上がりを確認した。周溝は、10cmほどの墳丘盛土の流土が堆積しているのが確認でき、それよりも上位では墳丘盛土から外側にかけて大きく掘削されている状況が確認された。以上のことから、周溝底部の幅は、3.6m程であると想定できる。なお、墳端の標高は、9.54mであった。

出土遺物としては、周溝埋土に、円筒・朝顔形埴輪片が包含されており、それよりも上位の掘削面には近現代の瓦や磁器が出土している。

## 5 トレンチ（第4図）

1次調査の2トレンチと1トレンチの間に設定した調査区である。調査の結果、墳丘側で近現代の溝状遺構と外側に段落ちを検出した。しかし今回の調査では期間中内での完了が困難であると判断し、調査途中で埋め戻した。（2023年12月に調査実施予定）

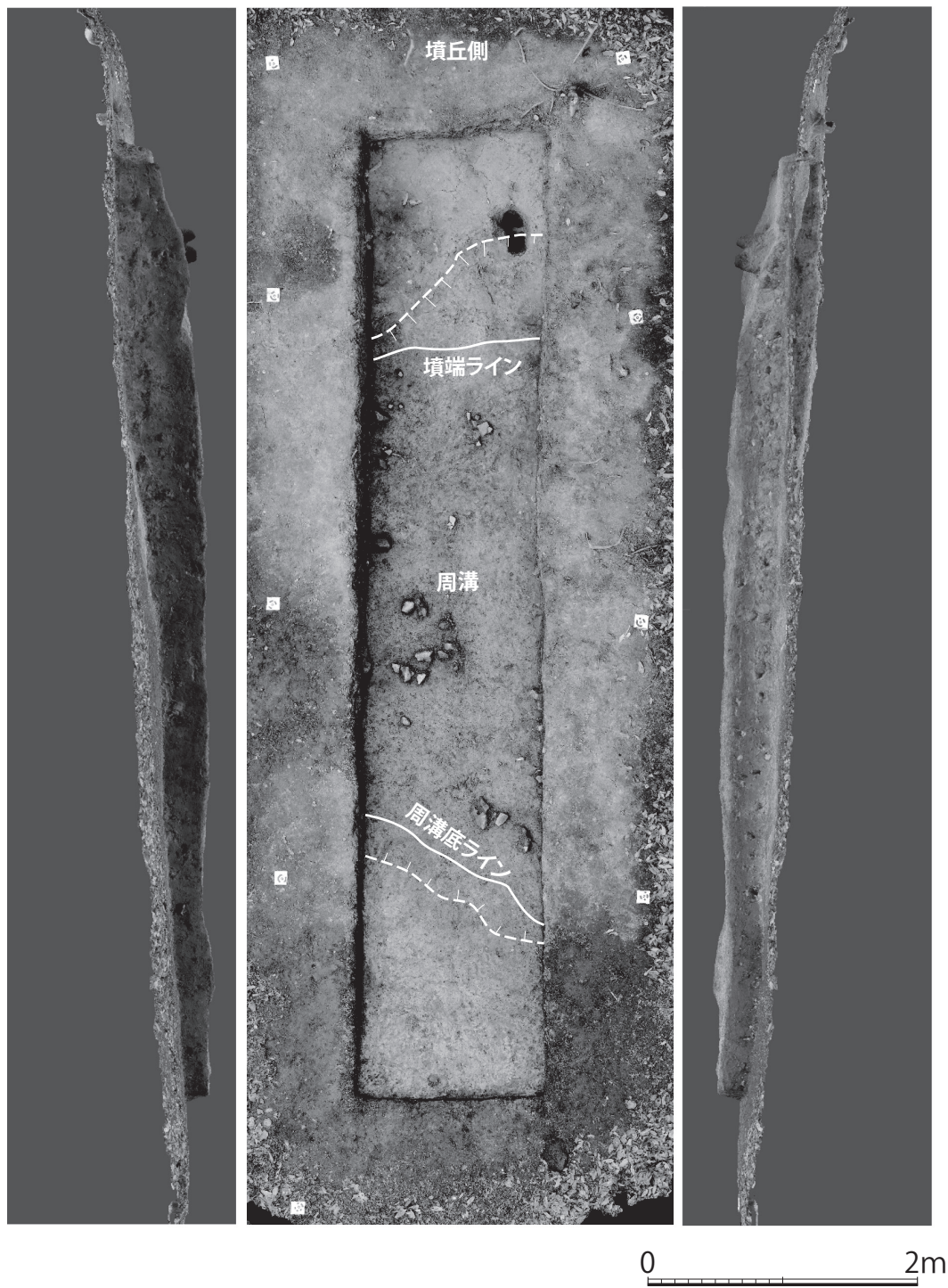
### 第1次調査のまとめ

以上の調査成果から、墳形については3トレンチで検出した墳端と、2トレンチで検出した墳端と考えられる溝状遺構から、径26mの円墳（第9図上）で周溝は伴わない古墳であると想定した。しかし、墳丘南側と東側の墳端がはっきりと確認できていない。墳形が円墳であるという確定と周溝の有無についてさらに検討を要するため、1トレンチの再調査及び、墳丘東側の2-3トレンチ間と1-2トレンチ間に新たにトレンチを設定し、継続して発掘調査を実施する必要があると判断した。

なお、1次調査では、家形、不明器財形、円筒、朝顔形埴輪等が出土し、その量は、遺物用コンテナ（長さ42cm×幅32cm×深さ15cm）3箱分出土した。また調査終了後は、トレンチ調査部分を埋戻した。

## （8）第1・2次調査成果のまとめ

第1・2次調査の成果から、墳端を確認できたのは1・3・4トレンチで、2トレンチでは明確な墳端ではなく、墳端の痕跡であった可能性がある溝状遺構を確認した。各トレンチからは葺石と考えられる拳から人頭大の礫が周溝埋土に含まれていたことから、築造当初は葺石が葺かれていたと考えられる。また、1トレンチからは、墳端の基底石と考えられる30cm程の礫を検出している。墳形については、1次調査終了段階で、径26mの円墳で周溝は伴わない古墳であると考えていた。しかし、2次調査の成果を踏まえると、第1次調査の3トレンチで検出した墳端と、2トレンチで検出した墳端と考えられる溝状遺構、第2次調査の1トレンチで検出した墳端と4トレンチで検出した墳端、また現状の墳丘斜面の遺存状況から、1辺26mほどの方墳である可能性が浮上した（第9図下）。なお、墳端が確認できた1・3・4トレンチの墳端の標高が、平均で9.5mとほ



第8図 4 トレンチ展開図<sup>(3)</sup> (S = 1/50)



1トレンチ遺物・周溝埋土検出状況



1トレンチ完掘状況



2トレンチ遺物出土状況



2トレンチ完掘状況



3トレンチ遺物出土状況



3トレンチ完掘状況

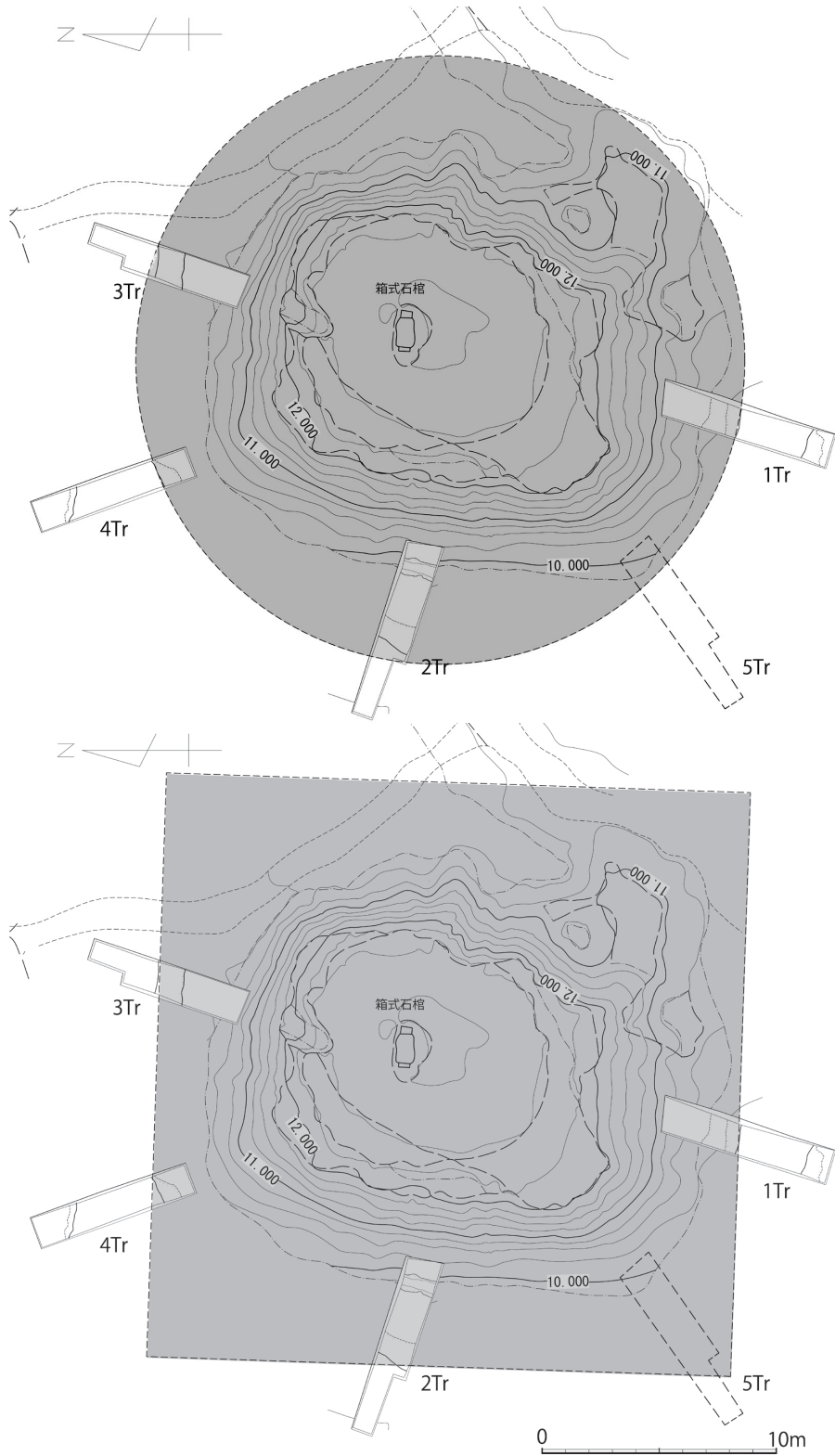


4トレンチ遺物出土状況



4トレンチ完掘状況

図版1 発掘調査の各調査区の写真

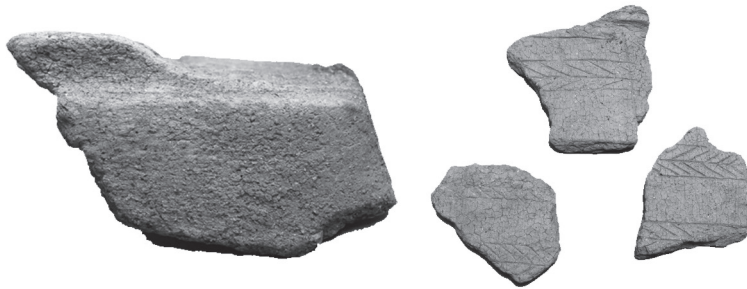


第9図 墳丘復元案 (上: 円墳案・下: 方墳案) (S = 1/300)

ほぼ同じ標高であることから墳丘の基壇がほぼ水平であると想定できる。また、第1次調査の終了時点で周溝は伴わないと考えていたが、1・4 トレンチで墳端とその対岸の立ち上がりが確認され、周溝底の幅が3.5～3.1m程であることから、3 トレンチのさらに外側に、周溝外側の立ち上がりが存在する可能性があることが判明した。

第2次調査終了時点での成果では、墳形が円墳か方墳であるのかを判断するには情報が少ない。仮に、方墳であることを検証するためには、3 トレンチの東側に調査区を設定し、隅角の部分の検出が必要となる。隅角の検出が困難である場合は、3 トレンチの墳端を確認した箇所から、直交するように新たに調査区を設定し、墳端の位置と状況を平面的に確認する必要がある。今後、その解明に努めていきたい。

なお、第2次調査では、円筒、朝顔形埴輪等が遺物用コンテナ（長辺46.5cm×短辺36.5cm×高さ20.5cm）2箱分が出土し、第1次調査出土分を合わせ合計5箱分の埴輪片が出土したことになる。出土した埴輪については、現在整理作業を行っているが、現段階での出土埴輪の時期については、入津原丸山古墳表採の埴輪と同じ時期で、中期初頭（集成5期）であると考えられる。また、2 トレンチで出土した家形埴輪片（図版2）については、寄棟型屋根構造を呈す家形<sup>(4)</sup>で、建物の隅部は稜線を伴うものではなく隅丸状となっている。壁と思われる破片の外表面には有軸羽状文が施されている。今後、遺物整理作業を進め、家形埴輪の接合と、他の形象埴輪の有無についても確認していきたい。



図版2 大原古墳出土家形埴輪片（左：屋根部片、右：壁部片）

#### 4、調査成果からみる古墳時代前期～中期にかけての首長墳の動向

第1地帯の西国東（豊後高田市域）では、入津原丸山古墳の築造をもって古墳の築造が開始される。その築造時期は、中期初頭（集成5期）で、調査を実施した大原古墳もこの入津原丸山古墳とほぼ同じ時期であることから、大原古墳の被葬者は入津原丸山古墳の被葬者と深い関係があった被葬者像が想定できる。この入津原丸山古墳が築造される前は、古墳時代前期初頭（集成1期後半）から前方後円墳が築造される川部・高森古墳群の被葬者集団が優勢で、ヤマト政権との結びつきが強い集団であった。しかし、中期初頭（集成5期）になって、北東に9kmほど離れた

豊後高田市域で帆立貝式前方後円墳である入津原丸山古墳が築造されようになると、それ以降は川部・高森古墳群では前方後円墳の築造が一時的に停止し空白期間が生じる。つまり、被葬者集団の優位性が入津原丸山古墳の築造をもって、その系譜が豊後高田市域に移っていくものと考えられる。豊後高田市域での首長墳の築造をみると、入津原丸山古墳の築造以降、現段階で判明している真玉大塚古墳（前方後円墳、全長100m）が中期後葉（集成7期）の築造で、2時期分の空白時期が認められる。この空白時期に、入津原丸山古墳の北側の同じ尾根上に立地している径54mや30m程の円墳で構成されるイド山古墳群や、さらにその北側の尾根には神人車馬龍虎画像鏡が出土したとされる鑑堂古墳などが、この空白の2時期に入ると考えられる。また、真玉大塚古墳と後期初頭の野内2号墳（前方後円墳、全長50m?）との間にも空白期間があることから、猫石丸山古墳の南側にある花仕切古墳群が入ってくると想定できる。つまり、入津原丸山古墳から北側に向け首長墳が築造されていくものと考えられる。

また、豊後高田市域の古墳の特長は、その立地状況である。現在の海岸線は近現代の干拓により、古墳が立地する丘陵から2.8kmも離れている。しかし、古墳築造当時の海岸線は、第3図のように古墳が立地する丘陵のすぐ近くまで海岸線が迫っていたと考えられている。つまり、当地域の古墳は海から見える位置に築造されているという特徴がある。海から見える古墳としては、第2地帯の速見郡（現杵築市）の小熊山古墳（前方後円墳、全長120m、集成2期）、御塔山古墳（造出付円墳、径80m、集成5期後半）、この二つの古墳と別府湾を挟んだ海部郡（現大分市）の築山古墳（前方後円墳、全長90m、集成4期後半）、亀塚古墳（前方後円墳、全長113m、集成5期）などがあり、いずれも中期初頭（集成5期）前後に築造されている。つまり、海から古墳が視認できるように築造されていることから被葬者集団は、中期を境にヤマト政権とのかかわりが突如として強くなり、当時の海路流通にかかわっていた可能性が高い集団であったと想定することができる。

今後、国東郡西側（現豊後高田市）の被葬者集団を考察するためにも、入津原丸山古墳、イド山古墳群、花仕切古墳群の墳丘測量調査、発掘調査による墳形および時期の確認など調査・研究の進展が求められことから、今後とも研究プロジェクトを推進していきたい。

なお、本論を執筆するにあたり、田中裕介氏には、学術発掘調査、出土埴輪の整理等にご協力を賜り、また、大田悠人氏には遺物整理でお世話になった。ここに御礼申し上げます。



[註]

- (1) 田中 2010「東九州における首長墓の変遷と性格」『九州における首長墓系譜の再検討』九州前方後円墳研究会と長 2022「豊後における中期末から後期の集落と墳墓」『集落と古墳の動態Ⅲ』九州前方後円墳研究会を基に作成。
- (2) 株式会社きょうわに依頼し、入津原丸山古墳付近に世界測地系（測地成果 2011）の基準点 2 点を設置。座標は、K-1 X = 6368.679m, Y = 41707.155m, Z = 8.715m、K-2 X = 63906.041m, Y = 41732.917m, Z = 9.224m である。
- (3) SfM による写真測量で作成したオルソ図の展開図。使用ソフト: Agisoft 社製 Metashape Professional (64bit)、撮影カメラ: Canon Eos R (フルサイズ)。
- (4) 福岡県の沖出古墳出土の家形埴輪と構造が類似していると考えられる。壁の施文については、大分市の亀塚古墳出土のしている家形埴輪片と類似している。

## 引用・参考文献

- 清水宗昭 2011「国東半島における首長墳の変遷」『古文化談叢』第 65 集 九州古文化研究会
- 下村精一・服部真和 1999「真玉大塚古墳出土の淡輪系埴輪について」『おおいた考古』第 12 集 大分県考古学会
- 田中裕介 1992「地域の概要－豊後－」『前方後円墳集成九州編』山川出版
- 田中裕介編 1998『大分の前方向後円墳三重・西国東地区編』大分県文化財調査報告書第 100 輯 大分県教育委員会
- 田中裕介 2000「大分県における埴輪の変遷と地域性」『九州の埴輪その変遷と地域性』第 3 回九州前方後円墳研究会大会資料 第 3 回九州前方後円墳研究会大会実行委員会
- 田中裕介 2010「東九州における首長墓の変遷と性格」『九州における首長墓系譜の再検討』九州前方後円墳研究会
- 玉川剛司 2003「古墳におけるデジタル測量の研究－大分県下の古墳を事例として－」『九州考古学』第 78 号 九州考古学会
- 玉川剛司 2004「小熊山古墳測量調査」『文化財研究所年報』2 別府大学文化財研究所
- 長長信 2022「豊後における中期末から後期の集落と墳墓」『集落と古墳の動態Ⅲ』九州前方後円墳研究会
- 吉田和彦 2013『杵築市埋蔵文化財調査報告書 15: 御塔山古墳発掘調査報告書』杵築市教育委員会